

【 特 別 企 画 】

主体創出のコミュニケーション空間
イソクラテスの「^{パナジェリコス}民族祭典演説」(*Panegyricus*)

柿田秀樹
(獨協大学)

批評の有効性とは、対立の当面の基礎を克服して、何らかの翻訳空間を開くことがどこまで可能かという問題なのである。それは比喩的に言えば、^{ハイブリディティ}異種混交の場を開くことだ。その空間では、二項対立のどちらが一方ということでもなしに、新たな政治目標が設定され、それによって我々が政治に寄せる期待の地平が当然ながら異化される。それは必然的に政治的契機に対する我々の認識形態そのものに変更を迫るものとなるだろう。ここで一番重要なのは、政治的行動の時を確実に把握すること、社会的な対立や矛盾を急いで統一してしまうのではなく、差異をもたらす構造を受け入れ、それに対する介入のチャンスを伺うことのできる空間を開くことだ。(pp. 44-45)

ホミ・K. バーバ『文化の場所』

ギリシアの^{レトア}弁論家、イソクラテスの弁論「^{パナジェリコス}民族祭典演説」(前380)は、ポリス間交流の場で行われることを想定された演説である¹⁾。祭典弁論に共通の論題であった「パナジェリコス」と名づけられていることが、ギリシア文化に固有な^{トポス}位相としてのこの主題の重要性を示している。相対的に高い自律性をもった諸ポリスの人々が集う祭典は当時の国際聖域であり、異なるポリス同士で繰り広げられる異文化交流の場でもあった。すなわち、本来、祭典はポリスの守護神を奉る文化的儀式であるが、祭典弁論に共通の論題である民族祭典はポリス相互の政治・文化交渉の結節点だったのである。ゼウスの栄誉をたたえるオリュンピアの汎ギリシア規模の競技会は数ある政治・文化的祭典の中でもとりわけ有名なものである。前6世紀になると、デルフィ、イストモス、ネメアでもオリュンピアと同様の祭典が開催されるようになり、祭典の重要性はギリシア文化の一部となって慣習化していた。

この国際聖域には、ギリシアの栄光と栄誉を求めて、多くの人々が植民市も含めてポリス内外から集まって来たのである。祭典では言論や身体の技量を披露する様々な競技会や演劇、穀物収穫の祝祭、そして宗教儀式等の催しが、何日にも(しばしば七日間に)わたりとり行われた。アテネでは、毎年開催される祭事に加えて、4年に一度の「汎アテナイ大祭 (great pan-Athenian festival)」と呼ばれる大規模な祭典が催されたという。汎アテナイ大祭はアクロポリスに奉られたアテネの守護神、アテナの加護に感謝し、ポリスの起源である守護神を讃える祭であった。汎

ギリシアの意識が如実に現れる場所でもある祭典は、ギリシア民族の榮譽を讃える空間であり、ギリシア人の同胞意識が自己同一性としてにわかに現れる空間である²⁾。この祭典という政治・文化的契機において、イソクラテスが弁論を披露する架空の舞台が設定され、この時機に相応しいトポスである歴史の言説を通じてアテネを中心としたギリシアの栄光が語られるテキストが「パナジェリコス」なのである。

イソクラテスはまるで現在が過去の擬態^{ミミクリ}であるかのように歴史を記述しながら、その時を越えて過去を現在に翻訳することに成功する。イソクラテスは当時、スパルタに対して弱者であったアテネの立場をそのまま表象 = 再現するのではなく、アテネが直面するスパルタによるギリシア支配と、その支配の中で1ポリスに甘んじているアテネの立場を新たな形相で表象 = 想像させるのである。立場を逆転した権力関係に置き換えることを可能とする^{リプレゼンテーション}表象は、言説の分節化を通じておこなわれる。過去の記憶の在り方が変化すると文化の記憶も変化する。歴史を叙述する史実的精度よりも、議論に必要で特定の習慣や制度、そして実践を含めた利用可能な過去を、たとえそれが捏造であっても、イデオロギー的武器として引用することは、ギリシア世界に言説上のインパクトを与えるのには充分であった³⁾。「パナジェリコス」で繰り返されるギリシアの歴史は現在のアテネの立場を解釈するための行為遂行的な言説手段となっている。

このテキストはギリシアの歴史と他者を領有することで、汎ヘレニズムを再構成する。国際交流の場で作られる共感や共同体の感覚に実は亀裂とアンビヴァレンスが既に孕まれていることを、このテキストは明らかに示している。テキスト中に表象されるギリシアとアテネ、スパルタ、そしてペルシアという4つの差異化された主体位置は、過去の記憶を現在で解釈する方法をイソクラテスに提供する。その解釈を通じて諸主体の位置に権力関係を埋め込む際に、遂行的な歴史解釈を可能にするドクサとしての「思慮」が、「主導権」という言説 = 唯物^{マテリアリティ}に形相を与えるのである⁴⁾。この過去の利用は、単なる歴史の参照ではない。過去の利用は主体位置の操作という契機を必然的に孕み、その恣意的操作によって、ギリシアの主体は常に亀裂を内包することとなる。より正確に述べるならば、ギリシアの主体に亀裂が生じているからこそ、亀裂は縫い合わせられるのである。

ペロポネソス戦争後の政治状況を考慮すると、「パナジェリコス」でイソクラテスが用いるレトリックの戦術が、歴史の領有というイデオロギー的な実践として浮かび上がってくる。ギリシアの支配者であるスパルタに直接挑戦することが困難であったイソクラテスは、ギリシア内部の覇権争いの結果であるスパルタの優位性とアテネの劣性を承認せず、むしろギリシア外部であるペルシアと内部のスパルタを節号させることで、スパルタの位置を脱臼させることに成功する。その結果、スパルタをギリシアの周縁に追いやり、代わってアテネ中心の汎ヘレニズムが構成される。当時、アテネの主導権を直接明言することが出来ないが故に、あえてギリシアの過去を領有することで、歴史をイデオロギーとして作用させるのである。

1. 歴史の領有

イソクラテスが「パナジェリコス」を執筆した当時の歴史的背景は、イソクラテスが何を主張しようとしていたのか、その真意を探り出すことができる可能性を示唆する^{マテリアル}素材である。しかし、本論にとってより重要な「歴史」の意味は、このテキストが単なる歴史叙述ではなく、イソクラテスの実践が「領有 (appropriation)」というレトリック理論であることに見いだされるべきで

ある⁵⁾。「パナジェリコス」の理論的価値は、領有する歴史が言説 = 唯物^{マテリアリティ}であり、イソクラテスの実践が過去にあった文化・政治背景の素材を領有によってどのように変容せしめるのかを探求することにある。テキストが領有する過去は、当時のアテネがスパルタの覇権に挑戦するために引用される言説 = 唯物であり、引用は彼の主張であったアテネを中心とした汎ヘレニズムの復権を根拠づける証拠となるのである。

テキストで構築される〈思慮〉という言説の実践が汎ヘレニズムの構築に（発話外）効果をもたらすわけではない⁶⁾。又、同様に、歴史の持つ（発話内の）効果を、過去と現在の直線的な因果関係に見いだせるわけでもない。〈思慮〉という言説が（発話外）効果を持っていたならば、イソクラテスは「思慮」というアテネが保持すべき覇権の正当性だけを述べれば良いはずである。又、アテネの過去の栄華を語るだけでスパルタがアテネに平伏するのであれば、歴史的事実を列挙するだけで事足りるはずであり、言葉巧みに歴史を引用する言説を練り上げる必要もない。イソクラテスは歴史を汎ヘレニズムという主張とその効果の媒介として把握するために、領有という操作を必要とするのである。

引用される言説が（発話内の）力を発揮するためには、言説 = 唯物としての歴史、政治的主題、神話等の文化表象、そしてもちろん言語（より正確にはシニフィアン）等が既に実践された媒体となっている必要がある。イソクラテスに引用される歴史は常に既に言説 = 唯物として文化実践の一部であり、文化的な浸透性が高い媒体であるが故に、その歴史はテキストで再生産されるのである。テキストには再生産の契機が常に内包されているが故に、言説 = 唯物として表象 = 代表される歴史はイデオロギーの影響を機能させることが可能である。

実際、「パナジェリコス」では諸処の言説 = 唯物が引用されている。ここではテキストに引用される言説 = 唯物を以下に列挙しておく。

- ・ 「パナジェリコス」とよばれる民族祭典という主題⁷⁾
- ・ 歴史的に形成された汎ヘレニズムの意識⁸⁾
- ・ ギリシアの他者としてのペルシア
- ・ ペロポネソス戦争とスパルタの裏切り、他

これらの言説 = 唯物の中でも、本稿では同時進行する、歴史的に形成された汎ヘレニズムの意識と他者としてのペルシアの領有に焦点を当てることとしよう。

まずは、汎ヘレニズムの意識である。この意識の形成はギリシアの植民活動と密接な関係があった。古くは紀元前9世紀の暗黒時代半ばから既に始まっていたと言われるアテネのイオニアへの植民活動だが、実際に本格的な活動が始めるのは8世紀半ばのイタリア、シチリア、トラキア、そして南フランスやスペイン、そして北アフリカや黒海沿岸地方への人々の移住を伴う植民市の建設がきっかけであった⁹⁾。前7世紀には地中海全域に広がった植民市では、貴族を中心とした移住者達は、宗主国のポリスの神を奉る神殿を建設し、原住民と接触し交流を深めるよりも、植民者のためのコミュニティが建設され自らの文化的優越性を感じるようになっていった。植民市の建設によるギリシア世界の拡大期の際、異民族との接触が起こるのは当然であるが、その接触を通じて、彼らへの排外観が醸成される。同時に、アテネに奴隷として流入して来た異民族（たとえば市中警備の任務を担当したスキュティア人や家庭内の子守役に使われたトラキア人）は、

その劣悪な生活環境から品性の墮落を防ぎ得ず、それが原因となって世間一般のひんしゆくをかうようになるのである。

こうして、前5世紀には、ペルシア戦争（前490 - 480）の勃発に伴い、ギリシア世界の汎ヘレニズム意識が決定的に醸成されていく。戦時にアクロポリスを占拠されたアテネ人には、その時の破壊行為の記憶が戦争の惨禍として残存し、「バルバロイ」と呼ばれる元来「鳥の囀りのようなわけの分からない言葉を喋る」という程度の意味であったその言葉が、ペルシア人を野蛮人という固定的な意味として指し示すこととなるのである¹⁰⁾。ペルシア人に固定されたバルバロイの対象はギリシアのバルバロイ観に「野蛮人」という負の意味を付与したが、同時にアテネ軍によるペルシア戦争の勝利はその裏返しとして多大な優越感と自信を植え付けることにもなったのである。軍事的に圧倒していたペルシア軍を撃退したことで、ギリシア人（特にアテネ人）は自らの文化とその政治体制に自信を持ち、ギリシアを文明社会と考える一方で、ペルシアを野蛮人の社会として自らと差異化するのであった（図1）。

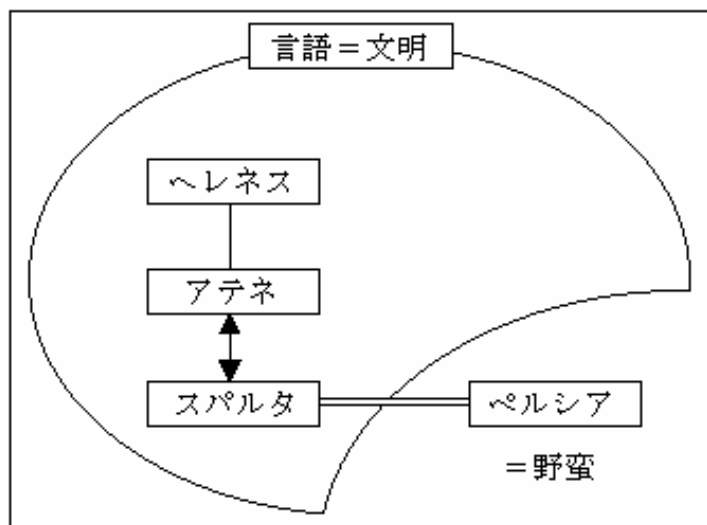


図1：言語による境界線

政治的には、ペルシア戦争で台頭しデロス同盟を結成（前478）したアテネは帝国として繁栄し、貴族社会に反旗をひるがえした市民の英雄、ペリクレスに率いられ前5世紀中葉までその栄華は継続する。アテネの自信は多くの歌詞や絵画といった文化作品や、歴史書や弁論などの政治媒体で表現されるようになった。しかし、アテネの繁栄はペリクレスが他界し、スパルタとの内戦であるペロポネソス戦争（前464 - 454, 431 - 404）で覇権をスパルタに奪われると、衰退の一途をたどることとなる（途中、前378年に第2次アテネ同盟が結ばれ、その政治力が一時盛り返す事もあったが、それもアテネが同盟国に課した重税によって同盟は破綻する）。スパルタが覇権を掌握した前404年からの30年間は、だれがいかにしてスパルタからギリシアの覇権を奪い返すかが歴史的課題となった。イソクラテスの活躍した時代は、このアテネの衰退期と時機を同じくし、「パナジェリコス」が書かれた前380年はまさにこの歴史的時機の真っ直中にあつた¹¹⁾。

歴史的課題に直面したイソクラテスが試みる「パナジェリコス」の表象は、歴史の領有による政治的レトリック実践である¹²⁾。イソクラテスは「パナジェリコス」が彼の政治的主張にとって、歴史を言説 = ^{マテリアライズ}唯物化する演説であることを次の様に述べている。「過去の歴史 (*praxes*) はわれわれ

れに残された共通の遺産であるが、時機をみてこれを引き合いに出し、それぞれにふさわしい感懐を新たにし、選り抜かれた語の組合せで表現するのは、思慮にすぐれた人のみがよくするところである」(9)。歴史は現在において言説＝唯物としての厚みをなす。現在において歴史の言説＝唯物が捉えられ作動するためには、生起する^{カイトス}時機が必要である。そのような時機を生起させるのが思慮である。単なる過去の回想ではなく、参照した過去が<今>という現在に生き、「ヘレネス」といわれるギリシアの主体が固執する<思慮>が、特定の過去としての言説＝唯物をイソクラテスに引用させる。思慮に優れた弁論家を具現化するイソクラテスがレトリックを実践するテキスト、「パナジェリコス」では、共通の遺産である歴史が適宜引用され、時機が彼の主張に織り込まれていく。「パナジェリコス」は単なる歴史叙述ではなく、その歴史を特定の視点から解釈させるための眼差しを構築するイデオロギーの言説であり、そのような眼差しを構築するための<思慮>という契機が、テキストに埋め込まれているのである。

<思慮>という契機は主導権の言説に現れる4つの主体位置にヒエラルキーを構成することを可能にする。構築される眼差しがひとつの時機として作用し、アテネ人が歴史を権力関係の言説として認識することが出来るようになる。イソクラテスは「パナジェリコス」の「...弁論の大半をこの主導権[hegeomai]の問題にあてたい」(19)と述べている¹³⁾。あえて「主導権」を問題とすることによって、「パナジェリコス」は<思慮>という眼差しを構築し、歴史をイデオロギーとして作用させる時機に変換する。主導権を歴史的主題として導入することによって、イソクラテスは言説のイデオロギー的影響を最大限に利用する。「[主導権についての]いずれの資格についても、遠く過去にさかのぼって検討を進めれば進めるほど、反対者の声は小さくなるからである」(23)。「パナジェリコス」の目的は、ギリシア民族としてのアテネに属性として備わる本来的な主導権を主張することにはない。アテネにはもはやない主導権の正当性を主張することがその目的である。政治的言説である「パナジェリコス」は、スパルタへの挑戦である¹⁴⁾。そのためにイソクラテスはギリシアの歴史を<思慮>という視点から再解釈するのである。「われらの国家は思慮と言論に関して他の追随を許さず、ためにわれらの国に学んだ者は人びとの師表となっている」(50)。したがって、「以前にわれらの国家が海上制覇していたのは正当であり、また現在も主導権を主張するのは正義にもとるものではないことを誰の眼にも明らかにしたい」(20)。「パナジェリコス」において、歴史はイソクラテスの主張を確証し裏書きするように機能する。レトリックが構築する眼差しと時機は歴史という言説の力を作動させる。

歴史の領有では、アテネの現在に意味を与える際、ギリシアの伝統の名の下に、過去の装いをもって繰り返され、置き換えられ、翻訳されるものがある。そうしたアテネの過去は、かならずしもギリシア全体の歴史的記憶の忠実な再現ではなく、古めかしさを巧みに装いながら権威を表象する戦略でもある¹⁵⁾。この繰り返しは、「ギリシアの栄耀を障げる者が誰かを白日のもとにさらし」(20)。これによって、ギリシアの主導権にまつわる起源に対して、スパルタが自らこそがギリシアの盟友であると考えた認識を否定する¹⁶⁾。それはスパルタの意識を掘り崩し、一般にギリシア統合の権威をもたらす主導権についてのスパルタの謬説に疑問を突き付けるのである¹⁷⁾。

2. 主体位置の操作

「パナジェリコス」はギリシアの歴史を解釈する「主導権」の言説に権力関係が内在するテキストである。その歴史解釈の言説は単なる過去の解釈ではなく、実はイソクラテスの反覇権的議

論の展開である。「すなわち、これは何よりもまず有益な政治的効果の実を挙げることを目指し、同士討ちによって功名を争う悪弊を断って、共同で外敵に対する戦いに向かうためである（19）。歴史解釈の言説を反覇権的議論せしめるために、「パナジェリコス」は新たな主体位置を配置する言説上の操作を必要とする。その言説上の操作によって、イソクラテスの歴史解釈を議論として成立させ、そうすることで、歴史を隠れ蓑とすることが可能となり、現実とは異なる「パナジェリコス」での異種混交的な主体位置の記述が自然化させられる。

その主体位置はどのように配置されているであろうか。汎ヘレニズムの語りの場というこの空間には、その特徴として緊張やアンビヴァレンスがある（図2）¹⁸⁾。イソクラテスに求められているのは、スパルタのギリシア支配にアテネの立場からの主張を反権威的姿勢で語り、その語りを汎ヘレニズムの地平で語りながら、敵対するアテネとスパルタの権威を統合するギリシアを表象することである。汎ヘレニズムは常に、それが出現するプロセスそのものにつきまとうアンビヴァレンスによって特徴付けられる。そこにあるのは、敵対的関係にあるアテネとスパルタが対立し、どちらが優勢であるか決着をつけることでどちらか一方を否定するのではなく、対立し敵対する二つのポリスの要素が汎ヘレニズムという枠組みの中で意味作用によって構築される複数の意味の生産性である。

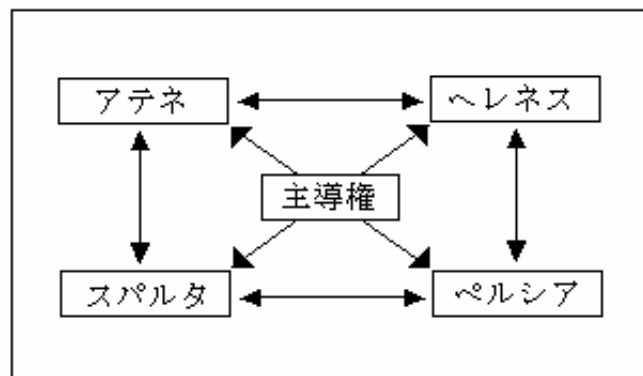


図2：「パナジェリコス」に見る主体の位置関係

「ヘレネス」という分裂した主体と同調してアテネとスパルタを差異化するイソクラテスの言説は、アンビヴァレントで分散したアイデンティティの形態を示している。「パナジェリコス」はギリシアの表象である「ヘレネス」の変転を取り込み、被支配者であるアテネが支配者のスパルタの位置からアイデンティティを見いだす＜思慮＞という象徴的媒介性を通じ、ギリシアの意志としての汎ヘレニズムを構築していく。「パナジェリコス」のアテネのアイデンティティは、汎ヘレニズムの政治的な幻想を、歴史を通じて演じてみせることによって、アンビヴァレントに構成される。しかし、アテネの政治的幻想を演じきるためには、アテネとスパルタとの差異、それぞれに利用可能な立場の差異を表す境界線を繰り返し横切る必要がある。

実際イソクラテスは「パナジェリコス」の議論を、分裂したギリシアの現状分析という問題から始めている。「現に、ギリシアの一方はわれらアテナイの、他方はラケダイモン[スパルタ]の配下にある。それぞれが国家を統治する国制によって、ギリシアのほぼ全体が二分されているのである」（16）。社会的な差異は、すでに公認された文化的伝統を通じて与えられる経験にはとどま

らない。差異とは共同体がひとつのプロジェクトとして立ち現れることを示すしるしなのだ。「もし誰か、その榮譽は彼らではなく、むしろわれらアテナイに属することを示してやれば、おそらく彼らもこの問題についての煩瑣な論争は打ち切って、[汎ヘレニズムという]共通の利益に眼を向けるのではないか」(18)。政治的に力を獲得していくこと、そして多文化間の政治的主張を押し広げていくことは、主体が抱える裂け目の可能性を視野に入れたうえで、連帯や共同体に関する問いを発することから始まる¹⁹⁾。イソクラテスの汎ヘレニズム・プロジェクトとは、構想であると同時に具体的な構築でもあって、諸ポリスをそしてアテネ自身をも「越えた」場所へと連れ出す。ギリシアの再考と再建の精神をもって、当時の政治的な諸状況へとスパルタを連れ戻すために²⁰⁾。

汎ヘレニズムの言語を遂行するためには、アテネとスパルタの差異を産出する条件として、両ポリス間に通約可能な全ギリシアの「主導権」という位相を導入し、スパルタをギリシアの主体に取り込まなくてはならない。「パナジェリコス」では、最も経験に富み、最も実力があり、さまざまな行動が他から尊敬を受けるものこそが主導権を取り戻す資格があると主導権獲得の条件が示され(21)、主導権はギリシアの善に多大に貢献するものでなくてはならないとイソクラテスは主張している(22)。この資格を獲得することが条件であるのは、「有為転変は世の常であって、至高の権力もけっして同じ者のもとにとどまるもの」ではないからであって、主導権の獲得はアテネの自己本位な主張の表明であってはならないのである²¹⁾。主導権という「榮譽を獲得する資格は第一人者にある」(22)ことを前提とすれば、「パナジェリコス」がアテネの資格を証明する試みであることが理解される。この条件を備えたポリスはアテネだけであり、実際にその資格を兼ね備えていることが、歴史的に順次語られていく。

アテネとスパルタの差異を通約可能にする「主導権」は<思慮>という等価性によって評価される(図3)。そして、主導権に関する評価が「思慮」によってなされるために、アテネのスパルタに対する優位が再確認されるのである。スパルタがギリシアの外部に位置し、その主導権に無関心であれば、そもそもアテネとスパルタを差異化する必然性は無くなってしまふ。したがって、イソクラテスはこの縫い合わせに最大限の注意を払うこととなり、図らずもスパルタに贅辞を送ることとなる。「われらの父祖とラケダイモンの父祖たちは、常日頃たがいに名誉を競ったが、かの時ほどに美しいものをめぐって勝利を競ったことはなかった。相手を仇敵ではなく好敵手と認め、ギリシア人を奴隷化するためにペルシア人に奉仕するのではなく、ギリシア共通の保全という点では心を一にし、ただいずれがその因となるかについて競争したのである」(85)。このスパルタへの贅辞は、彼らがギリシアの主導権を把握する資格を持ち得る可能性を示唆する。スパルタが評価されるべき理由は、彼らがギリシア共通の保全という主導権を発揮するために思慮を働かせた事実に見いだされる。しかし、スパルタがギリシア主体の一部である限りにおいて、スパルタも思慮を発揮する潜在性を既に兼ね備えてはいるが、その素質は主導権を発揮すべき第一人者としては未だ十分ではない。ここで導入されるギリシアの「思慮」という等価性には、その資格に優先順位が常につきまとうのである。つまり、この通約可能性は同時に権力関係にも転位することを可能としている。

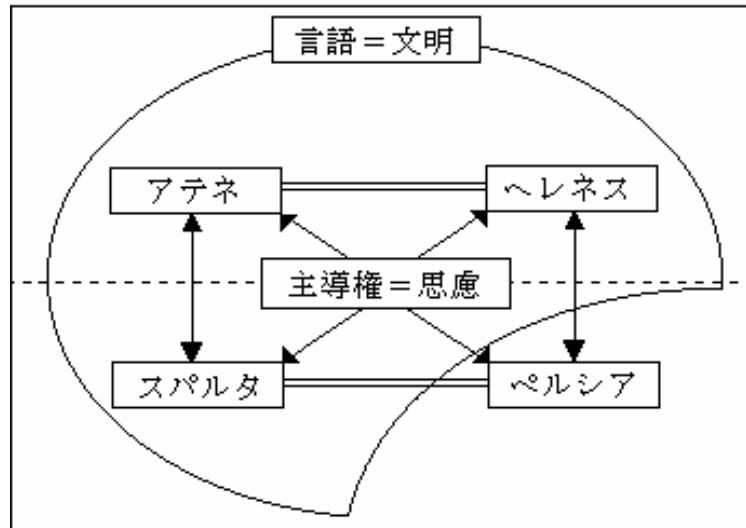


図3：思慮による差異化

スパルタもアテネも共に主導権を握る可能性を持っている。しかし、イソクラテスはアテネとの対比によって、思慮が欠如したペルシアとスパルタを節号する。「わが国[アテネ]は他国の興隆を妬まず、また他国の内部に擾乱のもとを植えつけることもしなかった」(104)。しかし、ラケダイモンは「対立する国制[民主制と寡頭体制]を同じ国内に併存させることによって、内には分裂抗争の火種をつくり、外にはこの対立する両派をしてわれらにおもねらしむがごとき政策」(104)をとり、「自らは十分な実力を有しながら、かつての同盟者がこれほど酷い艱難に遭う一方で、ペルシア人がギリシア人の汗馬の労によってその支配の座を固めるのを看過しているではないか」(125)。すなわち、スパルタは思慮の不足によって、ペルシアという「君主制国家の樹立に手を貸すまでに転落した」(125)。

「パナジェリコス」の戦略は、その敵対的でアンビヴァレントな分節化構造を換喩的に表象することなしには、文字通り表現不可能である。ギリシア人の集合的意志としての汎ヘレニズムはその発話をいかにして表象の主体とし、ギリシアを代理 = 代表するものとして確定し得るだろうか。「パナジェリコス」は、ギリシアのイメージを語るスパルタからの視線を伴った言語を変革して、アテネの政治的アイデンティティや表象を語る汎ヘレニズムの言語を遂行するのである²²⁾。

差異の領域が重なり合ったり置き換えられたりすることで現れてくる主体の裂け目。市民としての属性や共同体の利益、あるいは「学問教養」という文化的価値といった複数の主体にまたがる集団的な体験は、そうした換喩的操作の裂け目においてこそ考えることができる。ギリシアとペルシアの差異を画定する際、境界線上に現れてくるのがスパルタである。もしくは、スパルタが境界線そのものを指し示していると言っても良い。主体はいかにして差異のそれぞれの「部分」(「パナジェリコス」においてはアテネやスパルタ等の各ポリスがその部分に当たる)の集積の「間」にあって、あるいはその集積を越えて形成されるのか。抗争するポリス間では、共有している歴史があるにも関わらず、価値観や意味づけや当面の課題設定をめぐるやりとりのなかで、常に協力したり対話をかわしたりするわけではない。それどころか、ときに究めて敵対的で、闘争したり、さらには共存が不可能であったりするのはなぜなのか。

イデオロギー的にアテネが覇権の位置に再配置される。ギリシアの自己同一性がアテネを中心

に再配置されることを可能とするのは一体何なのか。イソクラテスは「パナジェリコス」で再生産されるギリシアの主体は自己同一的本質の探求ではないことを明確に述べている。ギリシアの主体を名付ける「ヘレネス」という名称は「民族を指すものではなく、精神を意味するものとみなされるに至り、ギリシア人と呼ばれるのは同じ血統に連なる人びとよりも、むしろわれらの学問教養を分かちもつ人のこととなっているのである」(50)。では、ギリシアの主体を組み替えることを可能とする「精神」としての「学問教養」が〈思慮〉として重要であることの論拠を保証するのは何か。この問いへの答えはイソクラテスによって常に既に導き出されている。引用し、領有され、イソクラテスによって書き直されたアテネを指導者とするギリシアの歴史である。

こうした同語反復的の構造について問いが避けられないのは、ギリシアの文化的アイデンティティについて説明する際に、敵対性や矛盾が内包された主導権という権力の言説がアンビヴァレントであると同時に境界線上で作られた記号であり、政治的な言説として〈思慮〉という言語的なドクサの力が備わっているからである²³⁾。「^{パナジェリコス}民族祭典演説」という文化的な活動は、それが敵対的なものであれ親和的なものであれ、民族の差異を表現する〈思慮〉という言葉、演説の遂行を通して再生産する。差異の表象を、伝統の定めた文字板の上に予め書きつけられた民族的特徴を反映したものと、安易に理解することは避けねばならない。

被支配者の視点による差異の社会的表現は、複雑でとどまることのない主張と妥協の領有プロセスである。それは、歴史の転換点に現れる文化の交雑を認めることにつながる。公的な権力や特権の周縁から意味を産出する「権利」があるとすれば、それはそうした周縁的な表現の伝統が根強く存在するからではない。その「権利」の源は、「被支配者」で在らざるを得ないアテネの政治につきまとう偶然や矛盾を通じて、その度に書き直されていく伝統の力にこそあるのだ。伝統によってもたらされる自己意識は、部分的なアイデンティティを保証するにすぎない。そうした自己意識は、過去を再現することで、他の互いに相容れないような文化的歴史的な特殊性を、捏造された伝統の中に取り込んでしまう。このプロセスによって、初めにあったはずのアイデンティティ、または「お墨付き」の伝統といったものを直接認識することが不可能になる。文化的差異が境界線上で出会う時、それはお互いに相争う結果をもたらすこともあれば、しばしば同意に基づくこともあるだろう。それは我々の伝統とか歴史に対する定義を混乱させ、異文化や暗黙の優劣等、通常認められた境界を引き直すのである。

結論

文化交流の場は優れて異文化の差異を顕在化させると共に、異文化間の権力関係を再配置する磁場として働く。国家や地域を単独に取り上げて、そのカテゴリーにしたがって概念操作や社会分析を行うことは、すでに過去のものとなりつつある。そうした動きの結果生まれてきたのが、主体の位置に関する認識である。人種、性差、階級、国家 こうした主体の位置が、現代世界ではアイデンティティを主張するとき、必ずつきまとうのである。理論のうえでも革新的で、また政治的にも重要なのは、そうした主体性を考えるにあたって、定言的命令や起源を語る物語を越えることだ。代わりに必要となるのは、文化の差異が分節化される際のプロセスや契機に注目することである。

文化を問う際、その位置を越境したところに選定するのが現代の文化研究のやり方である。現代の我々は、文化の存在をその越境線上に見いだすのである。越境される文化とは、新たな地平

のことで、過去を捨て去った新たな文化創造のことでない。そこでは、差異と同一性、過去と現在、内と外、そして内包と排除が複雑に絡み合って新たな形象を生み出していく。越境される文化は、土着のものから引き離され、攪乱されるのであり、移りゆく時間のなかで文化の主体は自らを見いだすのである。

註

- 1) イソクラテスが実際にこの演説を聴衆の面前でおこなったわけではない。通説では、イソクラテスは非常に内気だったため、公の場で弁論を披露しなかったと言われており、この説の妥当性はギリシア史学者間の合意となっている。Matsen et. al. の “Isocrates” を参照。
- 2) 「さて次に、祭典を開催した人びとがわれわれに残し伝え、正当にも賞讃されているところの慣習は、その間戦いの鋒をおさめて和平を結び、打ち続く敵対を解消して一つ所に集合し、しかるのちに祈りと供犠とともに捧げて、すでに結ばれている血のつながりをあらためて確認する一方で、未来にわたって互いの友好関係を確立する、すなわち古い友誼を新たにし、新しい絆を結ぶものである」(43)。
- 3) フィンリー (Finley) は歴史の政治的影響を認め、イデオロギーの役割について次のように言及している。“Continuity in time helped consecrate 'national' identity, and therefore identification with the system, a sense of common involvement, belief in the legitimacy of the regime” (p. 133)。
- 4) イソクラテスのドクサと思慮、およびレトリックの関係については、Takis Poulakos の “Isocrates' civic education and the question of *doxa*” を参照。
- 5) 領有とマテリアリティ、引用可能性の関係については、Judith Butler の *Bodies that matter* を参照。
- 6) 本稿では実体を伴わないイデオロギー的概念であることを < > 括弧表記 < 思慮 > によって、そしてテキストからの引用を「」括弧の「思慮」として、区別した表記を用いる。
- 7) そもそも「パナジェリコス」と名指される民族祭典という主題が、当時の言説 = 唯物であった（「パナジェリコス」1-3）。たとえば、リュシアスが紀元前384年の演説でこの主題に言及したことが記され、ゴルギアスは紀元前408年にオリンピック祭典でこの主題の演説を行っている。
- 8) アテネの栄華が語られた極めつけは、ペリクレス（前495頃・前429）が戦死者を追悼するために行った前430年の葬送演説である。アテネの栄光を自我自賛すべく、アテネを「ギリシアの学校」と述べ、その力を誇示する実践がこの有名な演説である。イソクラテスの引用したペリクレスの存在が言説 = 唯物としてアテネのドクサを構成したことに関しては、Takis Poulakos の “Isocrates' civic education and the question of *doxa*” を参照。
- 9) ギリシア史に関しては、Joint Association of Classical Teachers の *The world of Athens: An introduction to classical Athenian culture* を参照。特に、初期の植民地の史実に関しては、“Colonization, early aristocratic government, Theseus and the unification of Attica; Sparta” (pp.2-5) を参照。
- 10) ギリシア社会の他者としてのペルシアの歴史の変遷と野蛮人の語義については、丹下和彦「ギリシア悲劇にみるギリシア的なものと非ギリシア的なもの」を参照。
- 11) アテネの没落とスパルタのギリシア掌握からおおよそ30年後、スパルタがテーバイに屈してその覇権的位置から転落する。代わって覇者となったテーバイも10年足らずで衰退し、最後にマケドニアの興隆に到りギリシア都市国家の主導的位置の奪取への野望は終焉を迎えることとなるのである。
- 12) イソクラテスが歴史を重視したことは周知の事実である。イソクラテスの歴史観に関しては、廣川洋一の『イソクラテスの修辞学校』、とりわけ「IV イソクラテスの教育」を参照。
- 13) 「主導権」と訳される “hegeomai” は “hegemony” の語源であるが、イソクラテスが取り上げる主導権が提起するのは、まさにヘゲモニーの問題である。すなわち、言説 = 唯物としての歴史によって遂行的に権力関係が構成される。
- 14) 弁論技術の誇示を旨とする他のソフィストとは異なり、イソクラテスは政治的な弁論を語ることを哲学者 = 弁論家の目的とし、その目的達成のために必要な手段を哲学 = 弁論の修得としたのである。「しかし、弁論の力量を披露するだけで事足りるとせず、政治目標の実現を図ろうとする者は、これら二大国家を説得し、互いに等分の利権を認めて指導の責任を分かちあうよう促し、またいまギリシア同胞から奪ってわがものとしようとしている利得は、外敵からこれを取るよう勧めなければならない」(17)。
- 15) 「パナジェリコス」に繰り返し現れるアテナイの過去の栄華(28-29, 34-37, 38-40, 41-50, 54-67, 68-98)は、その語りが汎ヘレニズムの意味を構成する際には、アテネの権威の根拠となっていることが理解できる。
- 16) 「これら、実際、わが国家 [アテネ] が最も古い起源にさかのぼること、また最も偉大で、この世で最も名高いものであることは、ひろく認められている。主張の基礎がこれほど堂々たるものであるからして、これに続く論点に拠って立てば、われらの尊重されてしかるべきことはいっそう明白なものとなる」(23)。
- 17) このレトリック的課題がどれほど困難なことであるのかについて、イソクラテスは次の様に述べている。「さて、わが国をそこへ導くのは容易であるが、ラケダイモンが現下の状況で説得に応じることはないだろう。彼らはギリシアの主導権が父祖伝来のものであるという謬説を継承し信奉しているからである」(18)。
- 18) 異種混交とアンビヴァレンスの関係については、ホミ・K. バーバ『文化の場所』の第4章「擬態と人間につ

いて「植民地言説のアンビヴァレンス」を参照。(H. K. Bhabha. (1994). *The location of culture*. London; New York: Routledge.)

- 19) 「現状では和平の協定を結んでもむなし。われわれは和平締結と銘打って実は戦争を先述べし、互いに回復可能な損害を与える機会を待っているだけだからである。このような画策を一掃した上で次にとるべき行動は、安全な都市生活と互いの強い信頼関係を取り戻すことである。その方案は単純であり、簡単である。すなわち、共同でペルシア討伐に当たらなければ、安定した平和を確立することはできないし、また同じ源泉から利益を引き出し、同じ敵に対して戦争の危険を冒すのでないかぎり、ギリシア人が心を一にすることもない」(172-73)
- 20) したがって、イソクラテスはソフィスト達のレトリック戦略を鋭く批判するのである。「実に、他の弁者もここから論を始めるべきであり、意見の不一致をまずわれわれに説きあかさぬうちに、性急に合意事項について勧告したりすべきではなかったのだ」(19)
- 21) 「さてそれでは、来るべきペルシア征旅にあつて、いづこが指揮を執るべきか。先の戦争において最も輝かしい評価を受けた国、そして幾たびも自国のみで進んで危険を冒し、ギリシアが共同で戦ったとき武勲の最高賞に輝いた国ではないか。自国のことは放擲して他国の安全のために尽くし、その昔、大多数の国の創立者であり、また後にこれらの国々を最大の災厄から救った国ではないのか。どうしてわれらの受ける処遇が酷いものでないと言えよう、もし苦難の大部分を分担し、名誉は最小に止められ、かつては全体のために前線にあつたのに、今度は他国の後塵を拝することを強制されるならば」(99)
- 22) 政治的アイデンティティや表象を語る言語の行為遂行性に関しては、ラクラウとムフが提唱するテクスト性と言説に注目すべきである。(E. Laclau & C. Mouffe. (1993). *Hegemony and socialist strategy: Toward a radical democratic politics*. New York: Verso.)
- 23) 超越論的シニフィアンとして機能する<思慮>がドクサであり、「パナジェリコス」でのイソクラテスのレトリックはドクサの同語反復の性質が鍵となる事を指摘した Takis Poulakos の “Isocrates' civic education and the question of *doxa*”を参照。

参考文献

- Bhabha, H. K. (1994). *The location of culture*. London; New York: Routledge. (ホミ・K・バーバ(2005)本橋哲也、正木恒夫、外岡尚美、阪本留美訳『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版。)
- Butler, J. (1993). *Bodies that matter: On the discursive limits of "Sex"*. London; New York: Routledge.
- Finley, M. I. (1983). *Politics in the ancient world*. New York: Cambridge University Press.
- Isocrates I*. (1991). (G. Norlin, Trans.) Rep. ed. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Joint Association of Classical Teachers. (1984). *The world of Athens: An introduction to classical Athenian culture*. Cambridge; New York; Victoria: Cambridge University Press.
- Laclau, E. & Mouffe, C. (1993). *Hegemony and socialist strategy: Toward a radical democratic politics*. New York: Verso. (エルネスト・ラクラウ、シャンタル・ムフ(1992)山崎カヲル、石沢武訳『ポストマルクス主義と政治 根元的民主主義のために』大村書店。)
- Matsen, P. P., Rolinson, P., & Sousa, M. (1990). *Isocrates*. In P. P. Matsen, P. Rolinson, & M. Sousa (Eds.), *Readings from classical rhetoric*, (pp. 43-44). Carbondale and Edwardsvill, IL: Southern Illinois University Press.
- Poulakos, T. (2004). Isocrates' civic education and the question of *doxa*. In T. Poulakos & D. Depew (Eds.), *Isocrates and civic education* (pp. 44-65). Austin, TX: University of Texas Press.
- イソクラテス(1998)小池澄夫訳『イソクラテス弁論集1』京都大学学術出版会。
- イソクラテス(2002)小池澄夫訳『イソクラテス弁論集2』京都大学学術出版会。
- 丹下和彦(2003)「ギリシア悲劇にみるギリシア的なものと非ギリシア的なもの」地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』彩流社。

廣川洋一（1984）『イソクラテスの修辞学校』岩波書店。

廣川洋一（1990）『ギリシア人の教育：教養とは何か』岩波書店。